

目 次

原 著

神 田 茂：昭和 18 年 V 月 11 日白晝の大流星	
附 昭和 18 年 X 月 18 日の大流星	13

資 料

無線報時修正値 (XII, I)	16
太陽黒點概況 (X 月の分)	17

天 象 欄

IV, V, VI 月の太陽・月及び惑星	18
----------------------	----

公 告

社団法人 日本天文學會總會

来る四月二十三日下記の如き通常總會を開催致しますから、會員各位は萬障御繰合せの上御出席下さい。

日 時	昭和 19 年 4 月 23 日 (日) 午後 1 時より
會 場	東京都北多摩郡三鷹町 東京天文臺
議 事	(イ) 昭和 18 年度會務及び會計報告 (ロ) 評議員半数改選 (ハ) 理事補缺推薦

春 季 講 演 會

日 時	昭和 19 年 4 月 23 日 (日) 午後 2 時より
會 場	總會に同じ
講 演	(イ) 交渉中 (ロ) 交渉中

參會者への注意

1. 來會者は靴又は草履を用ひられたし。
2. 來會者は名刺に特別又は通常會員と記し受付に渡されたし。
3. 交通は省線『武蔵境驛』より 3 軒半 (乗合自動車『大澤』下車)。
京王電車 調府より 4 軒 (乗合自動車『松の木』下車)。
4. 今回は天體觀覽を行はず。

昭和18年V月11日白晝の大流星

附昭和18年X月18日の大流星

神 田 茂

序 昭和18年V月11日正午過ぎ本州中部地方の上空に大流星が現はれた。その観測報告4個が東京天文臺回報(222)に發表されてゐる。其他東亞天文協會に報告されたものその他數個の観測を得たので、不十分乍らその経路の大要を推定することができた。白晝の大流星は極めて珍しいものであるからこゝにその概要を報告する。

報告概要 1a. 名古屋市(136°58'E, 35°10'N)鈴木正名氏観測, 11^h55^m頃東北方向, 北より東に飛ぶ。光度強く, 速度遅し。繼續時間15秒位, 地平面落下直前消失す。

1b. 愛知一中生某観測, 鈴木正名氏調査報告(磁石と分度器にて)始めて認めた點東北高度30°—35°, 視界から去つた點は東高度20°附近。

2. 富山市總曲輪(137°13'E, 36°41'E)中野敏男氏観測, 12^h0^m北方仰角80°の所より白青色二重環の如き非常に光輝あるものが南々東に向つて緩かに流れ約7—8秒の後消えた。消滅點の高度約40°, 光度は始めは非常に明るく月の明るさ, 次第に光度を減じ金星位となる。

3. 静岡縣賀茂郡三濱村子浦國民學校(138°47'15"E, 34°40'17"N)大石喜三郎氏報, 12^h5^m頃太陽の如く白く輝くボール大の大きさに感じたもの北方の空より南方太陽の2/3間程東へ空の見える限り續く, 頭上直上を通る。

4a. 神奈川縣高座郡大和村(139°27'E, 35°32'N)大和學園高等女學校森本義夫氏他生徒20名観測, 12^h0^m北方約70°の高度より, 南西稍低き高度に至る。繼續時間7秒, 光芒は幅満月の $\frac{1}{4}$, 長さ満月の2倍, その色僅かに緑を帯びた淡青白色, 光芒の末は微かに橙黄味を帯ぶ。

4b. 東京市四谷區内藤町六中校庭(139°43'E, 35°41'N)にて5年生森本明信氏観測, 父義夫氏報, 北西相當の高度より南方へ飛行機の普通飛ぶ位緩かに飛ぶ, 繼續時間5—6秒, 光芒の色は僅かに綠色を帯ぶ。

5. 神奈川縣立横濱第一中學校(139°37'.2E, 35°26'.8N)教室の窓より生徒某観測, 秋山徳巳氏報告, 正午少し前, 西南方向, 南方下方へ, 始め太く後細くなる, 繼續時間數秒。

6. すべて神奈川縣立第二中學校報告。

6a. 2年井村良亮君観測, 12^h2^m横専綜合グラウンドにて昆虫採集中, 頭上より南方へ黄色の光の塊が大分速く飛ぶ。

6b. 3年白井勳君横濱市港北區高田町西原にて11^h50^m頃, 上空を赤, 黄, 綠色の流線型の美しき光塊南方より少し西へ飛ぶ。

6c. 4年大江某神奈川縣逗子町にて南西方, 薄青色, 月より稍大。

6d. 2年正田信郎君横濱驛北東方臺地高島山の塀の向ふより「ガスタンク」の上方へ, 黄味を帯びた綠色, 大き満月より稍小。

6e. 2年松原晃君高島山にて昆虫採集中, 先方から赤, 黄, 淡青の順, 東北方より西南方へ, 平沼タンクの上で消えた(高島山よりタンクの方向は南約28°西)。

6f. 2年藤本光博君12^h頃山の方から見えた, 銀色で屋根の上へすれすれに飛んだ。

6g. 2年飯村泰三君兒童遊園地(139°35'E, 35°26'N)よりの歸りに西から東へ直径3糎位のもの飛ぶ, 色は黄, 白, 赤を含む。

6h. 2年泊瀬川都君11^h45^m頃, 兒童遊園地よ

りの歸途保土ヶ谷へ向つた途中、西方より流星の様なもの飛んだ。廻りに竹があるので坂をかけ降りて見た所根岸方面即ち東方へ飛び去つた。縦と横との割合は 1:4、白銀色で黄味を帯ぶ。高度 30° 位。

6i. 2年佐藤雄一君神奈川區淺下町にて蝶採集中、太さ 6 糎、長さ 40 糎、色赤、青、黄。

6j. 2年中村利夫君正午過ぎ港北區新田町にて、南東より北西へ。

6k. 3年西貞君 12:00 頃神奈川區富ヶ谷國民學校前にて、眞北より眞南へ地に平行に、仰角約 60°、色太陽と同じく白銀色、大さ戦闘機隼號が 500 米位の高度を取りたる程の大きさ、流線型。

6l. 3年森嘉久君保土ヶ谷區月見臺自宅南向の窓より、北より南へ、前部圓形にて後部三角形、前部黄色に少し赤色を混ぜた色、後部は澄みたる青色にて少し黄色を含む。

7. 保土ヶ谷國民學校生徒約 30 名晝休中同校庭 (139°36'2"E, 35°26'44"N) にて北々西より眞南へ、南方約 50 米離れた浴場の煙突の少し上にて消えた。仰角約 30°。色青黄、太陽の様な色。大さ約 20 糎、速さ海軍四發大型飛行艇よりも速く、隼戦闘機の水平飛行より少し遅し。(淺居氏調査)

8. 保土ヶ谷町岩崎國民學校生徒約 130 名、同校校庭にて、北より南へ、青白色。

9. 保土ヶ谷富田高等國民學校報告。

9a. 西山級 3 名の兒童觀察、西から東へ、橙青色、大さ月より稍小。

9b. 成田級 11 名觀察、西から南へ、青色、大さ 4—20 糎。

9c. 青木級 1 名觀察、西南へ、青白色、大さ 5—20 糎。

9d. 上村級 1 名觀察、南から北へ、圓く細い尾を引く、青赤、大さ顔位。

10a. 東京市深川國民學校 6 年生服部守三君他一同觀察、11°58' 北より西を通り南へ、高度 50.—60°、繼續時間約 10 秒、色中央部緑、周圍桃色。

10b. 東京市深川區平井三丁目にて倉田桃代氏觀察、晝食休息時間、北より南少し西へ、50—100 米位の上空を長さ 1 米餘の尾を引き直径 15 糎位の大きさ、色は空色にて緑をかけたもの。(この

2 項毎日天文館秋元徹郎氏報告)

11. 千葉縣東葛飾郡八木村駒木新田、常磐線柏驛北方 (139°58'E, 35°53'N) にて 3 名觀察、陸軍技師 (氣象) 佐々倉航三氏經緯儀にて測定報告、發光點南 75° 西高度 20°、消滅點南 15° 西高度 5°、色白し。

12. 千葉市彌生町東京帝國大學第二工學部 (140°6'3"E, 35°37'4"N) にて冶金學科渡邊秀夫氏他 14 名觀察、渡邊氏報告。發光點北約 40° 西より南約 20° 西へ仰角 30°—40° 位、色は中心は青白色、外側は白、光芒を有す。直径太陽の $\frac{1}{3}$ 乃至 $\frac{1}{2}$ 、速度は遅く、角速度毎秒 20° 位、約 5 秒間認められた人もあつた。(雜誌科學第 13 卷第 7 號より抄出)。

13a. 茨城縣立水海道中學校生徒中島明君外 7 名觀察、12^h 頃同校運動場にて西北方より東南方へ、約 10 秒間繼續。

13b. 同校生徒飯田武夫君自宅 (結城郡大生村上新田) にて、南へ進行、青白色、發見後 2—3 秒にて消ゆ。

14. 水海道高等女學校 4 年飯塚八重子氏他 11^h 50^m 頃、同校運動場にて、西北方より南方へ、青白色、圓錐形にて先端は青白色濃く後方は段々淡し。

15a. 茨城縣新治郡九重村倉掛中島喜美氏、西南方高く西から南へ、青白く輝く。

15b. 筑波郡小野川村館野高層氣象臺にて飯島昌子氏、12^h5^m 頃、北より南へ、青白く輝く。

15c. 同郡同村松野木飯島ひさ氏、12^h5^m 頃、田端横場 (北西) 上空 20° より谷田郡航空隊上空へ、青白く光輝あり。

15d. 同郡同村國民學校木村、星田、成島、柳澤 4 氏、同校にて南方より東南方へ、青赤色。

15e. 同郡谷田部町谷田部井上、本郷、明間 3 氏谷田部國民學校にて南方より東南方へ進行、青紫色。

15f. 同郡同町福田町新關光治氏谷田部國民學校にて、北より南へ、青白、發見より 30 秒位繼續、大さ 2 寸、長さ 4 尺位。

15g. 土浦市鈴木、田村、豊島 3 氏同市龜城公園にて西方より東南方へ視角 60° 位コバルト色、3 秒間位。

以上の報告の中、1, 2, 10 は東亜天文協會小楨孝二郎氏より報告、3, 4, 11 は東京天文台回報に發表されたもの、13—15 は高層氣象臺北岡龍海氏調査關口鯉吉氏へ報告のものであり、5—9, 11 は筆者宛のものである。

経路の概略 以上の観測は何れも餘り精密なものではなく、詳しい経路を算定する事は不可能であるが、圖を用ひて概略の経路を求めた結果は次の通りである。

出現の時刻 昭和 18 年 V 月 11 日 12^h45^m 頃
發光點 富山灣東部 137°.5E, 37°.0N 高さ約 160 杆

消滅點 伊豆七島 139.2E, 33.7N 高さ約 20 杆

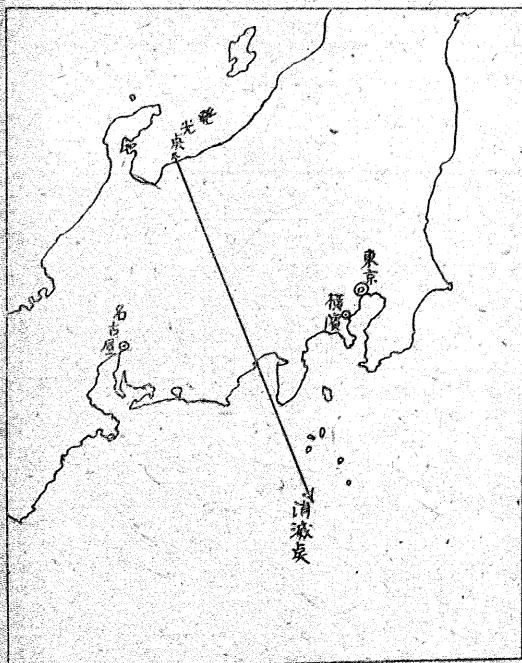
経路の長さ 420 杆, 速度 毎秒 60 杆位

輻射點 353°+64° (北 23° 西, 高度 19°)

光度 満月位

音響に關する報告は全くない。

以上によつてこの大流星は北陸富山灣の上空約 160 杆の高さの邊から輝き初め、本州中部地方の空を横斷して太平洋に出で伊豆半島の東南海上の高さ約 20 杆の上空で終つてゐる。圖はこの流星の経路を地球上に投影したものである、報告の集



1943 年 V 月 11 日大流星の経路圖

つたのは西は名古屋市より東は茨城縣に及んでゐるが、恐らく關東地方、中部地方の殆んど大部分の土地から見る事が出来たであらう。

この様な白晝出現する大流星は極めて珍しいものであるが、突然出現する流星について背景に何にも據り所のない晝間では方位角及び高度の見積りの正確を期することはなかなか困難である。今後この様な晝間に大流星を觀測される際の爲に二三の注意を述べると、附近に樹木、家屋、遠方の山等があればこれ等地物に對する位置をよく見定めて、出来ればスケッチによつて出沒位置を精確に記入する。次に經緯儀の如き器械で方位角及び高度を測量するか、又は夜間になつてから同じ場所に立つてスケッチに相當した位置を星の間から読み取れば、赤經は兩時刻(恒星時)の間隔を差引すればよく、赤緯はそのまゝでよろしいから比較的正しい位置が決定出来る。

この様な附近に委託すべき地物がある時はまだよいが天頂近くになると更に困難を感じる。粗略ではあるが手をつかつて方位角及び高度の概略の値を求めるのもよい。通常右手を充分伸して見た際小指から人差指まで四本の指を揃へた兩端の挟む角が約 9 度あるので、この様な自分で適當な物指をもつて普斷から角度の概略の目測の練習をしておけば、大流星の場合に限らず何かと便利なことがある。

今回の大流星には音響に關する報告がなかつたが、この様な火球には大音響を伴ふものがあり、時にはかなりの遠方まで達する場合があるから注意し、又爆發とか分裂等があれば前記の方法でその點の方位角、高度を觀測し報告されるとよい。

昭和 18 年 X 月 18 日の大流星

昭和 18 年 X 月 18 日夜千葉縣南部の上空に大流星が現はれ、その経路を推定し得たのでこゝに附記する。

報告 1. 名古屋市中區旅籠町 (136°53'58"E, 35°9'12"N) 青井秀生氏變光星觀測中大流星を觀測す。

時刻	19 ^h 49 ^m	光度	-2 ^m —-4 ^m
發光點	2 ^h 50 ^m +10°	消滅點	2 ^h 45 ^m +3°
色	白	備考	火の粉を残して

飛ぶ

2. 東京都小石川區關谷精造氏 19^h50^m 頃歩行中 (觀測地 139°43'2"E, 35°42'4"N) 一大光芒と共に稻妻の如き鋭さを持つ大流星を觀測す。

發光點 23^h0^m+12° 消滅點 21^h40^m-17°
 繼續時間 1.5 秒 光度 1^m-(-5^m)-(-3^m)
 -1^m

速度 迅速 色 黃白色

備考 光度甚大, 痕約 3 秒に亙る

3. 東京太田隆廣氏觀測。(觀測地 139°49'12"E, 35°40'23"N)

時刻 19^h53^m (2^m 位の誤差あり)

位置 λ Aqr と α PsA とを結ぶ約 15°

繼續時間 $\frac{1}{2}$ 秒 光度 α Lyr の約 5 倍
 速度 速 色 青白色

經路 すぐ爆發す 天候 雲量 0, 快晴
 備考 爆裂に白き條痕を約 10 秒程度残す
 以上の報告の中 1 は日本天文學會宛, 2 は東京天文臺宛, 3 は東亞天文協會急報 635 號所載のものである。

經路 以上の中主として 1, 2 の觀測より經路を求めた。

出現の時刻 昭和 18 年 X 月 18 日 19^h50^m

發光點 千葉縣清澄山北方 140°.2E, 35°.2N

高さ 84 籽

消滅點 三崎南方 139.6E, 34.9N 高さ 57 籽

經路の長さ 68 籽 速度 毎秒 46 籽

輻射點 54°+40° (北 56°, 高度 24°)

光度 金星大

(昭和 18 年 XII 月神奈川縣湯河原町にて)

資 料

無線報時修正値

東京無線局 (船橋) を經て東京天文臺より放送した昨年 12 月、今年 1 月中の報時修正値は次の通りである。

學用報時は報時定刻 (毎日 11 時 21 時 23 時) の 5 分前即 55 分より 0 分までの 5 分間に 306 個の等間隔の信號を發信するが此の修正値は、それら 306 個の信號の内約 30 個の信號を測定し平均したるもので全信號

の中央に於ける修正値に相當せるものである。

分報時は 1 分より 3 分まで毎分 0 秒より半秒間の信號を發信するがその修正値は學用報時のものと殆ど同様である。

次の表中 (+) は遅れすぎを (-) は早すぎを示す。(東京天文臺)

1943 XII	11 ^h	21 ^h	23 ^h	1943 XII	11 ^h	21 ^h	23 ^h
	學用報時	學用報時	學用報時		學用報時	學用報時	學用報時
1	- .089	+ .014	+ .066	16	+ .038	+ .053	+ .047
2	+ .033	- .056	- .034	17	+ .105	+ .113	+ .102
3	- .059	- .036	- .007	18	+ .146	+ .168	+ .164
4	- .030	- .053	- .040	19	- .059	- .069	- .081
5	+ .013	- .027	- .019	20	- .032		
6	+ .001	+ .035	+ .029	21		+ .025	+ .006
7	+ .036	+ .027	+ .023	22	- .067	- .047	- .063
8	- .095	- .125	- .126	23	- .017	- .020	- .032
9	- .099	- .240	- .240	24	- .043	+ .011	- .023
10	- .064	- .037	- .021	25	+ .011	+ .017	- .021
11	- .037	- .012	+ .016	26	- .071	- .008	- .095
12	- .042	- .051	- .020	27	- .038	- .047	
13	- .024	+ .032	+ .067	28	- .023		- .100
14	+ .013	+ .032	+ .051	29	- .042	- .070	- .089
15	+ .058	+ .080	+ .084	30	- .043		
				31		- .107	- .123

1944			1944				
I	11 ^h	21 ^h	23 ^h	I	11 ^h	21 ^h	23 ^h
	學用報時	學用報時	學用報時		學用報時	學用報時	學用報時
1	-.044	-.063	-.071	16	-.014	+.019	—
2	-.056	-.056	-.055	17	+.012	-.039	-.040
3	-.027	-.066	-.062	18	-.129	-.057	-.101
4	-.042	-.059	-.053	19	-.105	-.037	-.021
5	-.072	-.114	-.116	20	-.074	+.037	+.036
6	-.110	-.096	-.119	21	-.022	-.009	+.029
7	-.108	-.049	-.089	22	-.022	-.011	+.024
8	-.045	-.021	+.002	23	-.024	+.027	+.041
9	-.081	-.090	-.080	24	-.001	+.001	+.014
10	-.051	-.017	-.017	25	-.015	-.012	-.042
11	+.018	+.056	+.064	26	-.005	-.006	-.018
12	-.063	-.081	-.054	27	-.071	-.083	-.099
13	-.076	-.051	-.084	28	-.039	-.043	-.062
14	-.007	-.019	+.009	29	-.069	-.038	-.048
15	-.019	+.014	+.008	30	-.072	-.049	-.077
				31	-.054	-.040	-.059

1943年のX月に於ける太陽黒點概況

日	黒點群	黒點數	黒點概況	日	黒點群	黒點數	黒點概況
1	—	—	観測なし	17	—	—	観測なし
2	—	—	“	18	1	2	東部に極めて小なる群(II)あり
3	—	—	“	19	1	2	(II)中央部へ進む
4	1	14	先月の(III)中心部に在り	20	0	0	(II)消失す
5	1	6	(III)大した變化なし	21	—	—	観測なし
6	—	—	観測なし	22	0	0	黒點なし
7	1	9	(III)西部に近附く,大した變化なし	23	0	0	“
8	—	—	観測なし	24	—	—	観測なし
9	—	—	“	25	—	—	“
10	—	—	“	26	1	4	東縁に黒點群(III)現はる
11	—	—	“	27	1	6	(III)大した變化なし
12	1	1	西部に極めて小なる群(I)あり,(III)隠る	28	1	4	“
13	0	0	(I)消失す	29	1	11	“
14	0	0	黒點なし	30	1	8	(III)中心部に入る,大した變化なし
15	0	0	“	31	1	3	“
16	0	0	“				

天 象 欄

IV, V, VI 月の太陽・月・惑星及び星座

太陽 去る III 月 21 日に春分點を通りすぎた太陽は、IV 月に入つては魚座より牡羊座にと進む、日出は益々早く日没は漸く遅くなつて、晝間が延びて来る。1 日及び 16 日正午の東京に於ける日出、日入、晝間時間、出入方位、南中高度を示せば次の通りで、春より夏への季節の移ろひをそのままに數字で拾ふのも興味がある：

	日出	日入	晝間	出入方位	南中高度
IV 1	5時 28分	18時 2分	12時 34分	北6.°1	58.°8
16	5 8	18 15	13 7	13.0	64.4
V 1	4 50	18 27	13 37	19.2	69.4
16	4 36	18 39	14 4	24.3	73.4
VI 1	4 27	18 51	14 24	28.2	76.4
16	4 25	18 58	14 34	29.9	77.7
30	4 28	19 1	14 33	29.6	77.5

V 月に入つては太陽は牡羊座南部より北東に進み、月末には牡牛座に入る。晝間は益々延び、南中高度もいよいよ高くなつて、輝やかなしい日射にも夏來るを思はせる。3 日は立春からの通日で所謂八十八夜に當り、6 日は太陽黄經 45 度で立夏となる。

VI 月に入れば太陽は牡牛座から双子座に進む、21 日 22 時 3 分夏至となり、この頃は一年を通じて晝間の長さ最も長く 14 時間 35 分に及ぶ、11 日は入梅である。

月 IV 月 1 日は蟹座西部にあつて月齡 7、これより IV, V, VI の 3 ヶ月間に於ける月の上弦、望、下弦、朔の日時とその時の星座を示せば次の通りである。

	日	時	分		星座
IV	9	2	22	望	乙女
	16	13	59	下弦	射手
	23	17	43	朔	牡羊
	30	15	6	上弦	蟹
V	8	16	28	望	天秤
	15	20	16	下弦	水瓶
	22	15	12	朔	牡牛
	30	9	6	上弦	獅子
VI	7	3	58	望	蛇遣
	14	0	56	下弦	水瓶
	21	2	0	朔	牡牛
	29	2	27	上弦	乙女

この間、赤道を越へて南に北に、星座の間を縫ひて行く天路歷程の道を進んで見れば、IV 月初め蟹座より東南に進んで IV 月 7 日赤道を越へて南へ向ひ 14 日射手座で赤緯最南 $-21^{\circ}7'$ に達し、それより北轉、21 日赤道を北に越へて 27 日双子座で赤緯最北 $+21^{\circ}14'$ となるといふ様に繰り返すのであるが見易い様に表にすると

次の通りである。

	日	赤緯	星座
IV	7 日	南へ	
	14 日	最南	$-21^{\circ} 7'$ (射手座)
	21 日	北へ	
	27 日	最北	$+21^{\circ} 14'$ (双子座)
V	5 日	南へ	
	12 日	最南	$-21^{\circ} 21'$ (射手座)
	18 日	北へ	
	25 日	最北	$+21^{\circ} 25'$ (双子座)
VI	1 日	南へ	
	8 日	最南	$-21^{\circ} 28'$ (射手座)
	14 日	北へ	
	21 日	最北	$+21^{\circ} 29'$ (双子座)
	28 日	南へ	

水星 IV 月初め魚座の東端より牡羊座に入つて順行を續ける、12 日東方最大離角 ($19^{\circ}35'$) で光度は $+0.2$ 等、日没後 1 時間餘も西天に觀望される。22 日留となつてそれより逆行に轉ずる。V 月も牡羊座にあつて 2 日内合、これより日出前東天の星となり、15 日留これよりまた順行となる。V 月 29 日は西方最大離角 ($24^{\circ}43'$) で光度は $+0.8$ 等、この前後數日は日出に先だつこと 50 分餘にして東の空に上つて来る。VI 月初の牡羊座より牡牛座にと順行を續けるが、次第に太陽に近づいて觀望出来なくなる。

金星 IV 月初め水瓶座の東部にあつて、曉の東天太陽に先だつ 51 分にして昇つて来る。これより間もなく魚座に入り順行を續けるが、この間次第に太陽に近づき觀望には不便となる。V 月初め牡羊座に入り 5 月下旬牡牛座に入り、次いで VI 月下旬には双子座の西端に達する。VI 月 27 日外合、これよりは太陽に後れて沈む宵の明星として夕べの空をかざる様になる。この期間に於ける出入時刻を摘記すれば次の通りである。

	出時刻	入時刻
IV 1	4時 37分	16時 9分
V 1	4 14	17 9
VI 1	4 4	18 14
VI 30	4 31	19 5

地心距離は IV 月 1 日 1.54 天文單位より次第に遠ざかつて VI 月末には 1.74 天文單位となり、光度も IV 月 1 日 -3.5 等より VI 月 30 日 -3.5 等となる。

火星 IV 月初め双子座の西部にある火星は順行を續けて、双子座を西より東へと横ぎり、V 月中旬には双子座の境を越へて蟹座に入り、VI 月初めには獅子座へと進む。IV 月頃は宵の西天にあつて日没後 2 時間餘も觀望

されるがⅥ月も末になると次第に太陽に近くなつて観望には適さぬ様になる。

この期間に於ける火星の出入の時刻の東京に於ける値を記せば次の通りである。

	出	入
Ⅳ 1	9 ^時 49 ^分	0 ^時 36 ^分
Ⅴ 1	9 6	23 40
Ⅵ 1	8 33	22 42
Ⅵ 30	8 3	21 38

地心距離は遠ざかる一方でⅣ月 1 日には 1.48 天文単位であるのがⅤ月 1 日 1.77, Ⅵ月 1 日 2.02, Ⅵ月 30 日には 2.23 天文単位となる。一方光度もⅣ月 1 日には +1.2 等であつたのが漸次暗くなつて、Ⅵ月末には +1.9 等となる。

木星 Ⅳ月初め獅子座の西端にあり、Ⅱ月 9 日及びⅢ月 7 日には月による掩蔽といふ珍しい現象を起した木星もⅣ月 8 日 23 時の會合で東京では掩蔽とはならず月の縁の北 10' 位の處をかすめて通り過ぎる。

Ⅳ月 10 日には留となつて、それよりは順行獅子座を徐々に東へと移り行き、Ⅴ月 8 日短、Ⅵ月も末になれば獅子座の主星レグスの數度近くまで接近して行く。

東京に於ける出入の時刻は次の通りで、終始観望に好適の位置にあり、オリオンからシリウスにかけての絢爛たる天上銀河街の光の凋落した晩春初夏の宵の空を飾る。

	出	入
Ⅳ 1	13 ^時 31 ^分	3 ^時 18 ^分
Ⅴ 1	11 34	1 20
Ⅵ 1	9 50	23 27
Ⅵ 30	8 15	21 41

この間地心距離もⅣ月初め 4.72 天文単位より漸次遠ざかつて、Ⅴ月 1 日 5.16, Ⅵ月 1 日 5.64, Ⅵ月 30 日には 6.03 天文単位となる。又光度もⅣ月 1 日 -1.9 等よりⅥ月 30 日には -1.4 等と僅かではあるが暗くなる。

土星 Ⅳ月初め牡牛座東部にあり、緩やかに順行を続け火星と共に宵の西天を飾る二つの大惑星として輝いてゐるが、やがてずんずん太陽に近くなつてⅥ月に入ると観望には不適當となる、Ⅵ月 21 日合となつて、これよりは曉東天に太陽に先んじて上つて来る様になる。この期間に於ける出入の概略の時刻を示すと次の通りである。

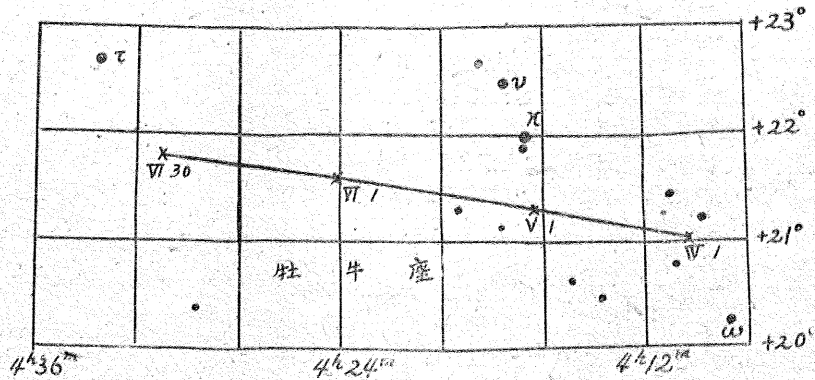
	出	入
Ⅳ 1	9 ^時 15 ^分	23 ^時 35 ^分
Ⅴ 1	7 28	21 49

Ⅵ 1	5 44	20 7
Ⅵ 30	4 3	18 29

地心距離はⅣ月 1 日 9.32 天文単位よりⅥ月末には 10.04 天文単位となる、光度はⅣ月 1 日 +0.3 等、Ⅵ月末日 +0.2 等と餘り變りはない。

天王星 Ⅳ月初めよりⅥ月末まで終始牡牛座中部にあり、アルデバランを含むヒアデス星團の數度北の星の間を極めて緩やかに順行中であるが、次第に太陽に近くなつてⅤ月 30 日には合となり、それ以後は日出前曉の東天に昇つて来る様になる。それ故観望に適するのはⅣ月中に日没後の西天にある時か又はⅥ月末東天早く昇る様になつてからである。双眼鏡又は小望遠鏡所有者の爲に經路圖の大略を示せば圖の通りである。

下に示したはこの期間の東京に於ける出入の時刻である。



天王星運行圖

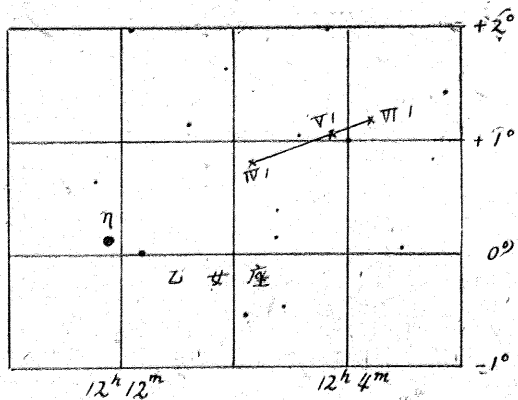
	出	入
Ⅳ 1	8 ^時 14 ^分	22 ^時 26 ^分
Ⅴ 1	6 20	20 35
Ⅵ 1	4 28	18 45
Ⅵ 30	2 36	16 55

地心距離はⅣ月 1 日の 19.9 天文単位よりⅥ月 30 日には 20.2 天文単位と僅かばかり増してゐる。

海王星 Ⅳ月よりⅥ月にかけて乙女座西部にあり、初め緩やかに逆行中であるがⅥ月 12 日留となつてそれより順行に轉じⅥ月 23 日短となる。観望には好適の時期であるが光度 8 等で可成り暗い爲、位置推算と適當な星圖が必要である。經路圖を次に掲げるから小望遠鏡所有者はこれによつて観望されたい。東京に於ける出入の時刻は下の如くである。

	出	入
Ⅳ 1	17 ^時 11 ^分	5 ^時 20 ^分
Ⅴ 1	15 10	3 21
Ⅵ 1	13 10	1 22
Ⅵ 30	11 12	23 20

この間地心距離はⅣ月 1 日の 29.3 天文単位よりⅥ月末には 30.4 と僅かばかり増して来る。



海王星運行圖

ブルートー 蟹座にあり光度 15 等級

小惑星 この時季に衝となる小惑星の内でかなり明るくて、小望遠鏡にても容易に捜し得るものとしては第 10 番の Hygiea がある。衝の日は IV 月 27 日でその時の光度は 8.4 等である、観望される方の爲に推算位置より描いた経路の圖(下圖)を掲げるが、實際の位置と推算位置とは僅かの差があることがある。赤經の O-C が +1^m の時は赤緯では -4'.4 であるから、そのことを念頭において圖の所要の日附の邊を捜されるとすぐ見附かる筈である。

星座 春から夏へ、IV 月から VI 月にかけての季節の移ろひは星座にも顯著に見られ、馭者、オリオン、双子、大犬、小犬など冬の空に輝いた星座は次々に西に没し去つて、代りに獅子、乙女、天秤などこの時節を代表する星座が脊毎に廻り来る。VI 月になると東から南の空にか

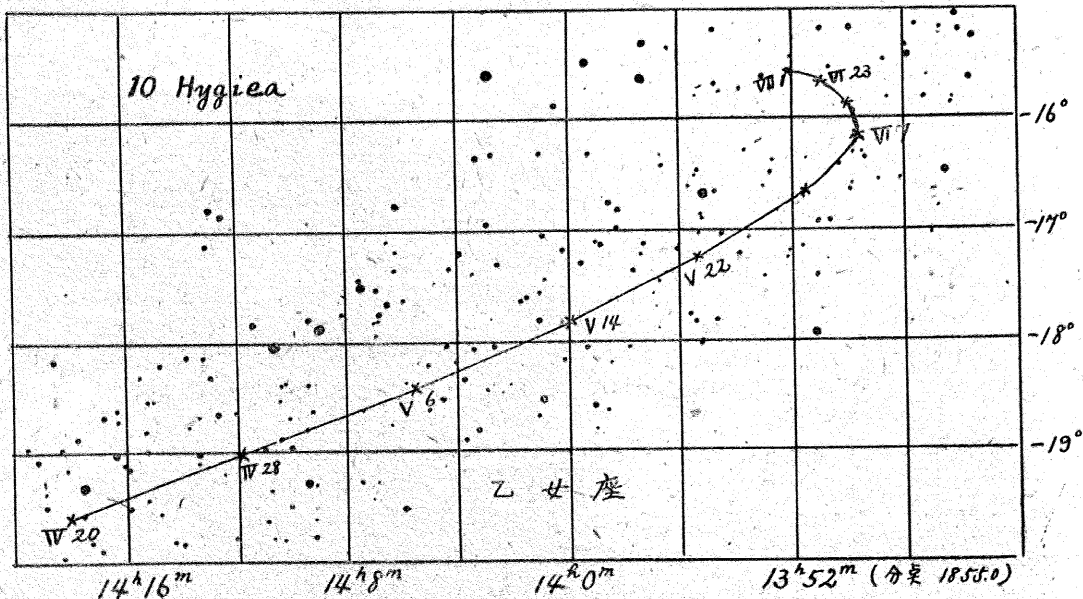
け白鳥、鷲、射手など夏の銀河の星々が登場して来る。

南方の鳥々に戦ひと建設が遅しく續けられてゐる時、今までは内地にゐて見られなかつた南の空の星にも一般の關心が纏ひ、又それらを観望する機會のある人も多いことせう。名前だけはよく知られてゐる南十字星なども、どれだか分らなかつたとか、違つた星を見てそれだと決めてゐた人もある様に聞いたので、それら南の星を拾ひ出して解説すると、先づお馴染の南十字星は十字座の α (1.1) 等, β (1.5) 等, γ (1.6 等), δ (3.1 等) の四つの星が形造る十字形で、この時節が正に観望の好期である。その全容を見るには少くとも臺灣南部まで行かねばならぬ。臺北では十字の最下端の星 α の高度は南中の時で 2 度餘であるから、殆んど地平の濃氣の中に消えて見へないでせう。それがマニラまで行くと 13 度まで昇り、昭南では 26 度となつてかなり高くなつて来る。十字形の縦の柱 α, β の概略の南中時刻(中央標準時)は次の通りである。

	臺北	マニラ	昭南
IV 1	0 ^h 36 ^m	0 ^h 38 ^m	1 ^h 47 ^m
V 1	22 42	22 45	23 53
VI 1	20 41	20 43	21 51
VI 30	18 47	20 49	17 57

南十字星について昇つて来るケンタウルス座の α (0.1 等), β (0.9 等) の二つの一等星の並んだのも南の銀河中での見物であるが、これらはいづれも日本内地よりは望めない。

ケンタウルス座では有名な ω 星團が東京では南中の高度 7 度餘となつて充分観望出来、僅かにこの頃の南天の星への憧れを醫して呉れる。



小惑星 10 Hygiea 運行圖

昭和19年1月25日印刷
昭和19年2月1日發行

定價金30錢
(郵稅1錢)

編輯兼發行人

東京都北多摩郡三鷹町東京天文臺構内
福見尙文

印刷人

東京都神田區美土代町16番地
(東東35) 嶋富士雄

印刷所

東京都神田區美土代町16番地
株式會社三秀舍

發行所

社団法人 日本天文學會

振替口座 東京13595

配給元 東京都神田區淡路町二丁目九 日本出版配給株式會社

THE ASTRONOMICAL HERALD

VOL. XXXVII NO. 2

1944

February

CONTENTS

S. Kanda: A Big Fire-ball seen on the 11 May 1943.....	13
Materials—Sky of April to June, 1944	9

天文学雑誌 第三十七卷 第二號
昭和十九年一月二十五日印刷
昭和十九年二月一日發行

9